

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	上代から近世における歌語「くものはたて」の研究：共起する語の調査から
Author(s)	元山, 美乃里
Citation	論叢 国語教育学, 19 : 1 - 12
Issue Date	2023-07-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/54979">10.15027/54979</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/54979">https://doi.org/10.15027/54979</a>
Right	
Relation	



# 上代から近世における歌語「くものはたて」の研究―共起する語の調査から―

元山 美乃里

## 一 先行研究と本稿の目的・方法

### (一) 先行研究

今回調査する「くものはたて」は、次の古今和歌集の歌について様々な歌学書や注釈書で考察がされている。

夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて

『古今和歌集』恋一・四八四、よみ人しらず

この歌について、竹岡（一九七六）<sup>1</sup>では、「雲の果てに向かつて物を思うのである」、片桐（一九九八）<sup>2</sup>で『雲の端々までも』『思ひ』を『遣り』、『ながめて』物思いにふけるのである」とある。

一方で、紙（二〇〇九）<sup>3</sup>では、現代の注釈書で「くものはたて」を「雲の果たて」と解する説が有力になってきていることを踏まえ、「雲の果て」という言葉と比較している。「雲の果て」は、雲が尽き果てることによって抽象的、観念的な終末点・消失点を表しているのに対して、「雲のはたて」は、手は届かないものの、もの思いとして辛うじて成り立つ範囲内というような具象的な末端部であると考察している。さらに、「くものはたて」を「蜘蛛の機手」に置き換えて読んだ重之の歌（「ささがにのくものはたてのうごくかなかぜをいのちにおもふなるべし」『重之集』）や、「雲の機手」として詠んだ寂昭の歌（「これやさば雲のはたてにおるときくたつことしらぬあまの

は衣」『新古今和歌集』）など平安期の用例を上げて、意義が揺れている状況にあったとしている。

ただし、これらの研究は古今和歌集の歌、もしくは平安期・鎌倉初期に限った調査である。また、平安期、鎌倉初期の歌も、限られた作者のものしか挙げられていない。

### (二) 本稿の目的

この研究は、歌語「くものはたて」について、上代から近世にかけて詠まれた和歌の用例を見ることが、その意味・用法の傾向や変遷を明らかにしようとするものである。先行研究で挙げられていない歌を加えて、上代から近世までの「くものはたて」の使われ方を調査していきたい。

### (三) 本稿の方法

今回は、用例を「日本文学 Web 図書館」の「和歌・連歌ライブラリー」<sup>4</sup>を使って収集した。その用例を上代、平安、鎌倉、室町、江戸のそれぞれの時代<sup>5</sup>に分けた。時代ごとの用例数は、次の表 1 の通りである。

〈表1〉時代ごとの用例数

時代区分	用例数
上代	0
平安	13
鎌倉	156
室町	99
江戸	24
計	292

今回の調査では、上代の「くものはたて」の歌は見られなかった。以下に今回調査した上代の和歌集を挙げる。

- ・『奈良帝御集』（書陵部蔵五〇六・七五）
- ・『人丸集』（書陵部蔵五〇六・八）
- ・『古事記』（日本古典文学大系三）
- ・『日本書紀』（日本古典文学大系三）
- ・『風土記』（日本古典文学大系三）
- ・『赤人集』（西本願寺蔵三十六人集）
- ・『家持集』（書陵部蔵五一〇・一一）
- ・『猿丸集』（書陵部蔵五一〇・一二）
- ・『万葉集』（西本願寺本）

このように時代ごとに分けた上で、「くものはたて」と共起する語を調べた。本稿における共起する語とは、名詞、動詞の中から本稿の筆者が選定したものである。本稿ではその中で多く使用されている語について考察を加える。今回取り上げた共起する語については、時代ごとに語数を示した表を末尾に載せる（表2）。

## 二 平安期の「くものはたて」

平安期には、一三例の「くものはたて」の歌が見られる。

「夕」、「空」、「物思ふ」の共起はそれぞれ三例見られる。次にその例を挙げる<sup>7)</sup>。

(1) 夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふ  
とて

〔古今和歌集〕恋歌一・四八四

(2) 夕さればくものはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふ  
とて

〔新撰和歌集〕恋雑・二一六

(3) 夕されば雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふ  
とて

〔古今和歌六帖〕天「くも」・五二一

これらは、「夕ぐれは」と「夕されば」の違いはあるものの、(1)の古今和歌集と同じ歌が新撰和歌集、古今和歌六帖にも取り上げられたものと思われる。

「風」が共起する例は三例見られた。

(4) よそにてもかぜにしたがふものならばくものはたてにか  
つならせきみ

〔九条右大臣集〕解題

(5) 吹く風に雲のはたてはとどむともいかがたのまん人の心  
は

〔拾遺和歌集〕恋四・九〇二

(6) ささがにのくものはたてのうごくかなかぜをいのちにお  
もふなるべし

〔重之集〕又、こせしの君のらうにて、くものてひとつ

おちたるが、二三日までうごくを・一八七

(4)の歌は風に従うと「くものはたて」に「きみ」がいるとい

うことを詠み、風の到達点として「くものはたて」を設定していると考えられる。一方で(5)の歌は、「くものはたて」を「とどまるもの」として詠んでおり、実体がある「雲の旗手」として詠んだとも考えられる。(6)は「くも」を「蜘蛛」として詠んだ歌であり、「風」は「蜘蛛の手」を動かすものとして詠まれている。

また、「春」が共起する例が一例、「秋」が共起する例が一例見られた。

(7) 天原春は殊にも見ゆるかな雲のはたても色増りけり

〔新撰朗詠集〕・三八一

(8) ゆくくものはたてよりこそまづはみれあきのはじめに  
れるけしきは

〔好忠集〕・五四四

ただ、(7)の「春」が共起する歌は、次に挙げる(9)の歌とほぼ同じである。

(9) 天之原(アマノハラ) 悠悠砥而已(ハルバルトノミ) 見湯

留飽(ミユルカナ) 雲之幡手裳(クモノハタテモ) 色滋

雁芸里(イロコカリケリ)

〔新撰万葉集〕・二八一

「悠悠砥而已(ハルバルトノミ)」を「春は殊にも」と詠んだことが意図的なのか読み間違いなのかは分からない。

また、(9)の歌は、「くものはたて」が「いろこかりけり」と詠むため、紙(二〇〇九)において、「視覚的に捉えられる実体をあらわすものであろう」と述べられている。他にも「色」が共に詠まれる歌には次のようなものがある。

(10) 色色の雲のはたてをかぎりにている日や弥陀のひかり  
なるらん

〔散木奇歌集〕悲嘆部「観無量経文十六想観いらんとする

日を見て仏のみくにおもふ」・九〇四、俊頼

やはり、「色色の雲のはたて」とあることから、(10)も視覚的に実体がある「雲のはたて」として詠んだ歌であることが考えられる。紙(二〇〇九)には「雲の旗手」と解しての作と考えられる」とある。

「ほととぎす」が共起する歌は一例見られた。

(11) いそげどもこよひはこえじおとはやまくものはたてにほ

ととぎすなく

〔教長集〕夏歌「暮山時鳥」・二四五

ほととぎすの鳴き声が聞こえてくる遠くの方を「くものはたて」として詠んでいる。「ほととぎす」には「死出の田長」という異名がある。『歌ことば歌枕大辞典』で「死出の田長」の項を見ると、「ほととぎすは「死出の山越えてきつらむほととぎす」(拾遺集・哀傷・一三〇七・伊勢)など死出の山(死後に越えていく山)から来て鳴くと詠まれ、しでの田長は死出を当てるといわれる」とある。「くものはたて」に鳴くほととぎすの声を聴くことで、死者に思いを馳せることを詠んだとも考えられる。

「さががに」が共起する歌は二例見られた。

(12) ささがにのくものはたてにかく糸のとかくにこそおも

ひみだるれ

〔久安百首〕恋二十首・六六六、親隆

一つは、前に上げた(6)の歌である。先に述べた通り、「くも」を「蜘蛛」として詠まれたと考えられる。詞書に「くものてひとつおちたるが、二三日までうごくを」とあることから、風に動く蜘蛛の手を、機織りの様子と重ねて詠んでいることが分かる。

(12) の例も「くものはたて」に「糸」を「かく」というところから、「蜘蛛の機手」として詠んだ歌と考えられる。『歌ことば歌枕大辞典』で「蜘蛛」の項を見ると、『日本書紀』允恭天皇八年の歌謡を原歌とした「我が背子が来べき宵なりささがにのくもの振る舞ひかねてしるしも」(古今集・墨滅歌・一一一〇)とあるように待ち人の訪れの前兆として詠まれる」とあり、(12)の歌は、題が「恋」であることから考えて、この古今和歌集の歌をもとに、待ち人の訪れの前兆として詠んだのではないかと考えられる。

(6)、(12)の例と同様に、「はたて」を「機手」として詠んだと考えられる歌に次のようなものが見られる。

(13) たなばたの雲のはたてにおもふらん心のあやもわれにまさらじ

『清輔朝臣集』秋「七夕言志」・一〇四

「心のあや」とあるので、直接的に機織りと関連しているわけではない。「はたて」に「機手」の意味を含むことよって「綾」という語が共起したと考えられる。

### 三 鎌倉期の「くものはたて」

鎌倉期には一五六例の「くものはたて」の歌が見られる。

「夕」や「暮れ」といった語が共起することが多く、夕暮れの時間帯を詠む歌が多いことが分かる。

(14) 秋をあきとおもひ入りてぞ詠めつる雲のはたてのゆふ暮の空

『老若五十首歌合』秋・二〇四

(15) ひこぼしはあふたぐれのそらはたて雲のはたてにもはおもはじ

『石清水若宮歌合寛喜四年』暮山花・四〇  
(16) はださむく風も秋なる夕暮の雲のはたてをわたるかりがね

『玉葉和歌集』秋歌上「秋歌とて」・五八七

(17) 夕日さす雲のはたての山のはにあまつ空よりちる桜かな

『拾遺現藻和歌集』春歌・六二

また、「風」が共起する例も多く見られ、次の(18)、(19)の歌のように、「くものはたての山風」や「くものはたての秋風」と詠まれている例が多く見られる。

(18) 桜色の雲のはたての山風に花の錦のぬきやみだれむ

『石清水若宮歌合寛喜四年』暮山花・四〇

(19) 今ほとて雲のはたての秋風にあくがれたるはつかりの声

『宝治百首』秋廿首「初雁」・一四二五

「物思ふ」が共起する歌は二二例見られた。

(20) ながめわびそれとはなしにもぞおもふ雲のはたてのゆふぐれの空

『新古今和歌集』恋歌二・一一〇六、左衛門督通光

(21) 物思ふ雲のはたてに秋立ちていくかもあらねど袖はぬれつつ

『洞院撰政治家百首』早秋五首・五八七、光俊朝臣

(22) ものおもふ心のおよぶ方はなし雲のはたてかあまのかぐ山

『和漢名所詩歌合』・一三九

(23) 物おもへば人もやみるとたづねばや雲のはたての秋の夕暮

〔為家集〕秋「秋雲」・五八〇

(20) のように「物思ふ」に加えて「夕ぐれ」や「空」が共に詠まれている歌も多い。「物思ふ」が共起する二一例のうち、一六例に「夕(ゆう)」が共に使われており、九例に「空」が使われていた。古今和歌集の「夕ぐれは」の歌に影響を受けていると考えられる。

平安期に共起する語として見られず、鎌倉期に見られる語として「月」が挙げられる。

(24) しるべする雲のはたての色なくは人の心の月をみましや  
〔百詠和歌〕武物部「旌」・一九一

(25) 夕暮は月まつとも物ぞ思ふ雲のはたての秋の山のは  
〔隆祐集〕秋歌中(右)・一二六

(26) ゆふぐれのくものはたてのなかぞらにやまのはとほくい  
づる月かげ  
〔雅有集〕九月十三夜崇福報恩院に侍りて、  
月三十首歌よみ侍りしに、夕月・八六

(25)、(26) のように、夕暮れに月を待つ、または月が出てすぐの夕方を詠んだ歌が多い。これは「くものはたて」が「夕」や「暮」との共起が多いことと関連すると考えられる。

また、「はたて」を「機手」とすることと関連があると考えられるような語も数多く見られる。「緯」が一五例、「錦」が一四例、「布」が一〇例、「衣」が九例、「糸」が四例、「綾」が三例見られた。

(27) あまつそら雲のはたてにみだれつつもあやなりやあそ  
ぶいとゆふ  
〔千五百番歌合〕春四・五二〇

(28) 嵐ふく雲のはたてのたえだえに露のぬきちる布引の滝  
〔建保名所百首〕雑二十首「布引滝撰津国」・一〇七八

(29) 立田姫くものはたてにかけておる秋のにしきはぬきもさ  
だめず  
〔道助法親王家五十首〕秋「夕紅葉」・六四二

(30) 日かげさすくものはたてのいとかやまくるればそらにか  
ぜぞすずしき  
〔明日香井戸和歌集〕山夕・一二五八

(31) 嵐ふく雲のはたてのぬきをうすみむらぎえわたる布引の  
山  
〔夫木和歌集〕雑部二「山ぬの引の山、伊勢」・八二三六

特に「布」が共起する歌は、一〇例すべてが鎌倉期の歌である。

ただし、(28)、(31) のように、「布引の滝」や「布引山」といった使われ方が多い。また、「糸」の例も(27)、(30) のように「糸遊」

や、「糸鹿山」と詠まれている。これらは、直接「機織り」に関連する内容ではない。平安期の「心のあや」の歌と同様に、「はたて」に

「機手」の意味を含むことから「機織り」が連想され、このような語が共起していると考えられる。

また、「ほととぎす」や「かり」などの鳥に関連する歌も詠まれている。

(32) 待ちくらすしるしはこれかほととぎす雲のはたてにこ  
ゑぞする  
〔正治初度百首〕春・三三〇、守覚法親王

(33) 夕日さすむかひのをかほととぎす雲のはたてに折はへ  
てなけ  
〔道助法親王家五十首〕夏「岡郭公」・三四六

(34) ながめする雲のはたてをとひがほに天つ空行く初雁の声  
〔日吉社十禅師歌合〕暮天聞雁・七

(35) かすみにもかくれざりけりゆふひさす雲のはたてをすぐるかりがね

〔統現葉和歌集〕春歌上「嘉元百首歌たてまつりし時、

帰雁を」・三五)

(32) から(35)の歌は、「くものはたて」をほととぎすやかりの鳴き声が聞こえてくる遠くの場所として詠んでいる。(32)、(33)の「ほととぎす」歌は、平安期の(11)の歌と同様に、死者への思いを詠んでいるとも考えられる。

「花」が共起する歌も複数見られる。

(36) ながめやる雲のはたても匂ふらんだかまの峰のはなの盛は

〔石清水若宮歌合寛喜四年〕暮山花・六二)

(37) やまひめの花のにしきをおりはへてくものはたてに風かをるなり

〔資平集〕春・一九)

(38) 山ざくらくものはたてのはるかぜにあまつそらなるはなのかぞする

〔雅有集〕春・二九五)

(36) から(38)の例は、「くものはたて」から花の香りが風に乘ってくる様子を詠んだものであり、この場合「くものはたて」は遠くの場所を指していると考えられる。

さらに、平安期と同様に「色」が共起する歌が一四例見られた。

(39) 夕づくひ山のあなたになるままに雲のはたてぞ色かはりゆく

〔順徳院百首〕雑十五首「夕陽入山晚雲変色之由、

又如見眼候」・八七)

(40) 夕暮の雲のはたての色なくて入日のかげをのこすやまぶき

〔為理集〕夕款冬・三七〇)

(3)のように「くものはたての色が変わる」という歌が見られ、視覚的に実体のあるものとして「くものはたて」を捉えたと考えられる。

また、「ささがに」が共起する歌も見られた。

(41) ささがにの雲のはたての時鳥くべきよひとや空にまたまし

〔文保百首〕夏十五首・国四二一、藤原実重)

(41)を見ると、「人を待つ」という内容から、やはり日本書紀の歌謡をもとにした古今和歌集の「我が背子が」の歌を前提として「蜘蛛の機手」と詠んでいると考えられる。

しかし、「空」が共に使われていることから、「くも」を「雲」と関連させて詠んでいるとも考えられる。

#### 四 室町期の「くものはたて」

室町期には九九例の「くものはたて」の歌が見られる。

鎌倉期と同様に「物思ふ」が共起する例が多く見られる。そのうち、「夕」も共に詠まれるのは一六例中六例あり、「空」もともに詠まれる例は三例見られた。

(42) 物おもふわざなりけるよ春の行く雲のはたての夕暮の空

〔為尹千首〕春二百首「暮春雲」・一九三)

(43) 物ぞおもふ花橘のむかしとふ雲のはたての袖のゆふ風

〔草根集〕夏「廬橘」・二四七二)

(44) とちはつる雲のはたてはみえねともおもひなる五月雨の

空

『家集(雅種)』夏部「五月雨」・六九

(45) くるゝ間のちきり待わひ物や思ふ雲のはたての星合の空

『慈照院殿義政公御集』浜五月雨・二一〇

また、平安期、鎌倉期と同じく、「ほととぎす」や「かり」が共起する歌も見られる。

(46) 天つ空我が思ふ人か郭公雲のはたてに声の聞ゆる

『宗良親王千首』夏百首「雲外郭公」・二一八

(47) 夕ぐれはなくね空なるほととぎす雲のはたてにたれをこ  
ふらん

『新統古今和歌集』雑歌上「夏歌の中に」・

一六六九、従三位氏久

(48) 山のはの雲のはたてを吹く風にみだれてつづくかりのつ  
らかな

『題林愚抄』秋部二「雁」・三五七三、定家

(49) 遠方の雲のはたてにきこえきてあまつそらなる初かりの  
こゑ

『言国詠草』初雁連雲・三一

(46)、(49)のように、平安期、鎌倉期と同様に、鳴き声が聞こえてくる遠くの場所を「くものはたて」と詠む歌が見られる。一方で、(47)の例では、「ほととぎす」が「くものはたて」に向かつて物思いをして鳴くと詠んでいる。このように、ほととぎすを擬人化させて詠んだと考えられる歌も見られた。

「色」が共起する歌は五例見られた。

(50) さくら色の雲のはたての山風に花の錦のぬきやみだれん

『題林愚抄』春部上「暮山花」・一〇七二、行能朝臣

(51) 紅のかすみの衣おりからや雲のはたても色をふかむる

『後花園院御集』霞・一四四四

この五例のうち四例は(50)、(51)のように「くものはたて」の「色」を詠んでおり、やはり視覚的に実体のあるものとして「くものはたて」を詠んでいると考えられる。

また、「はたて」を「機手」とすること関連させて詠まれたと考えられる歌も見られた。「緯」が六例、「錦」が四例、「衣」が六例、「綾」が三例、「糸」が一例である。

(52) からにしき雲のはたてに立田山入日やそむる峰の紅葉は

『沙玉集II』秋・三七五

(53) 衣かも雲のはたてのぬきを薄み声もたまらぬほととぎす  
かな

『草根集』夏「雲間郭公」・二一七二

(54) みだれくる初かり金のこゑのあや雲のはたてにおりやか  
くらん

『草根集』秋「初聞雁」・四五二三

(55) 秋の日は糸よりよわきさがにの雲のはたてに荻のうは  
風

『草根集』秋「夕萩」・四六一八

「綾」は(54)のように機織りと直接関係しない、「声のあや」として詠まれた歌が見られた。鎌倉期(28)の例の「布引の滝」などと同じように、直接は関係しないものの、「機手」とすることを踏まえた詠みと考えられる。

また、「さがに」が共起する歌は三例見られた。そのうち一例は先に出した(55)の歌である。その他には次のような歌が見られる。

(56) そらだのめいく夕ぐれぞさがにのくものはたてにまち



よわりつつ

『延文百首』恋二十首「寄蛛恋」・一七八二

(57) くべきよひかねてしるきやささがにの雲のはたての松虫の声

『公義集』秋「虫」・一一五

(56) の歌は題が「寄蛛恋」となっており、題からも「くも」を「蜘蛛」として詠んでいることが分かる。また、(56)の歌では「まぢよわりつつ」と詠み、(57)の歌では「松虫」の「まつ」を「待つ」と掛けることで、古今和歌集「我が背子が」の歌をもとにして、人を待つことを詠んだと考えられる。

また、鎌倉期よりも室町期に多く見られる共起語として「影」が挙げられる。

(58) ゆふひかげ雲のはたてにうつろひて月まつほどの空ぞさびしき

『延文百首』秋二十首「秋夕」・一七四二、正二位藤原経頭

(59) タぐれはまだみぬ人をこふるかな雲のはたてを面影にして

『李花和歌集』恋歌「百首歌よみ侍りし中に」・一八七

(58) の例は「夕日影」が「くものはたて」に映ると詠んでおり、(59) のように「くものはたて」を「面影」にすると詠んでいる。「くものはたて」が視覚的に実体のあるものとして詠まれていることが分かる。

## 五 江戸期の「くものはたて」

江戸期には二四例の「くものはたて」の歌が見られる。

「物思ふ」が見られる歌は七例見られた。

(60) 夜をいそぐ心にけふも物や思ふ天つほしあひの雲のはたてに

『後十輪院内府集』夏「織女夕心」・五八一

(61) いつまでとうはの空なる夕暮の雲のはたてに物思ふらん

『霞閑集』恋歌「寄夕恋」・七七六

(62) わすれずは雲のはたてをそれと見よわが物思ふ夕ぐれのそら

『鈴屋集』恋歌「寄雲恋」・一一七六

「物思ふ」が見られる歌の中で、(61)、(62)のように、「夕」が共起するのは七例中四例、「空」が共起する例は三例である。やはり江戸期にも古今和歌集の「夕ぐれは」の歌が影響を及ぼしていると考えられる。

また、「ほととぎす」が共起する歌は四例、「かり」が共起する歌は五例見られた。

(63) ほととぎす雲のはたての一声に心そらなる物をこそ思へ

『三草集』夏「ほととぎすをよめる」・四〇八

(64) 子規なれはいかなる物かおもふ雲のはたての夕暮の声

『芳雲集』夏部「夕郭公」・一一一五

(65) 余波おもふ雲のはたてに夕暮のつばさかすめるあまつ雁がね

『霞閑集』春歌「帰雁連雲」・九八、遠江守広通妻男子

(66) タぐれの雲のはたてをながむればかりは七たび音づれにけり

『うけらが花初編』雑歌「人の七年の忌に、秋無常」

・一三六〇

「ほととぎす」が共起するものには、室町期と同じく(63)のよ

うにほととぎすの音が聞こえてくる遠くの場所を「くものはたて」とする歌や、(64)のようにほととぎすが物思いに耽るといふほととぎすを擬人化したと思われる歌が見られた。(63)、(64)の歌にはそれぞれ「物をこそ思へ」「物かおもふ」とあるが、これはやはり「死出の田長」というほととぎすの異名を踏まえた死者への「物思い」である可能性が考えられる。

江戸期には「色」が共起する歌は見られなかった。ただ「紅」が共に詠まれた歌が一例見られる。

(67) 夕日さす高ねのきくを紅の雲のはたてとみぞまがへつる  
『佐保川』紅雲城・三三七

(67)の歌は、「紅の雲のはたて」とあるため、他の時代の「色」と共起する歌と同様に、視覚的に実体のある「雲」を表していると考えられる。

また、「はたて」を「機手」とすることと関連があると考えられるような語は「緯」が一例、「衣」が一例、「綾」が一例見られた。

(68) ささがにのくものはたてのたてぬきもをればかつちる野  
べの秋かぜ  
『林葉累塵集』秋歌中・四五八、通直妻

(69) おり出すきのふの雲のはたてより年の羽衣けふや立つら  
ん  
『挙白集』春歌「立春天」・三二二

(70) あかず聞く雲の旗手の夕日影こゑのあやおるそののうぐ  
ひす  
『難波捨草』春上「聞鶯」・二八、如雲

(70)の「綾」は、室町期の(54)の歌と同じく、「声のあや」として使われている。

さらに、「ささがに」が共起する例は二例見られた。そのうち一例は先に挙げた(68)の例である。他には次のような歌が見られた。  
(71) ささがにの雲のはたてを打ちながめくべきよひとはいつ  
かたのまん  
『道遊集』恋歌「寄雲恋」・二二四三

(71)の例は、人を待つ様子を詠んでいることから、やはり日本書紀の歌謡をもとにした古今和歌集の「我が背子が」の歌を踏まえたと考えられる。一方で、(88)の例は、「くものはたてのたてぬき」とあることから、重之集の「ささがにの」の歌を踏まえて「蜘蛛の機手」として詠んだと考えられる。

## 六 まとめと考察

和歌に使われる「くものはたて」という語について、今回の調査では上代に見られなかったものの、平安期から江戸期の和歌に使われたことが分かった。

さらに、共起する語の観点から調査をした結果、以下のようなことが考察される。

・ 全用例を合わせると、今回調査した語では「夕」が最も多く共起する。夕暮れを詠んだ歌は数多く見られるのに対して、朝、昼、夜を詠んだと分かる歌が見られなかったことから、「くものはたて」は夕暮れの時刻を詠むときに使われる歌語だということが分かる。

・ 鎌倉期以降、「物思ふ」と、「夕暮れ」「空」といった語が共起する例が多く見られる。このことから、「くものはたて」の歌の多くが古今和歌集の「夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて」の歌に影響を受けて詠まれたと考えられる。

・平安期以降の各時代で「色」や「色」に関連する語が共起する歌が見られる。これは、「くものはたて」の「くも」を視覚的に実体のある「雲」として詠んでいると考えられるものが多い。

・平安期以降の各時代で「機織り」に関連する語が共起する歌が見られる。これは、「はたて」を「機手」と連想して詠んでいると考えられる。

・平安期以降の各時代で「ささがに」が共起する歌が見られる。今回の調査の中では、重之集の歌が最初である。日本書紀の歌をもとにした古今和歌集の「我が背子が来べき宵なりささがにのくもの振る舞ひかねてしるしも」の歌に影響を受け、待ち人が来る前兆として「くも」を「蜘蛛」と詠んでいると考えられる。ただし、鎌倉期には、「空」とも共に詠まれるようになり、「くも」が「雲」であるという意識もありながら詠まれた可能性がある。

・平安期以降の各時代で「ほととぎす」が共起する歌が見られる。「ほととぎす」の異名である「死出の田長」を踏まえ、死後に超えていく山から来て鳴くと言われる「ほととぎす」を詠むことで、死者に対して思いを寄せる意味があった可能性がある。この場合の「くものはたて」は、物理的に遠い場所を指すだけでなく、現世から見たときに手の届かないところにある死後の世界を指していたと考えられる。

以上のように「くものはたて」は、平安期から江戸期にかけて、遠くを表す意味、視覚的な実体のある「雲」を表す意味、「蜘蛛の機手」を表す意味と様々に理解することのできる例が見られる。その中で、時代が下るにつれて、初めて共起する語が見られたり、一つの歌で二つ以上の意味を加味していると考えられる歌が見られたりする。これによって「くものはたて」はその用法の幅を広げていっ

たことが分かる。

## 七 発展的課題

今回は「くものはたて」という歌語について広く用例を集めて調査を行うことで、「くものはたて」の使われ方の詳細を明らかにすることができた。

今後は、「くものはたて」以外の歌語についても、上代から近世の和歌に使われた「歌語」について、勅撰和歌集に限らず、私撰集や私家集、歌合、連歌からも広く用例を集めて調査し、対象となる歌語の使われ方を明らかにしていきたい。

今回調査するにあたって、「くものはたて」に見られる特徴なのか、和歌全体で見られる特徴なのかを判断することが難しかった。今後は、より正確な調査のため、対象とする語と似た言葉や和歌以外で使われる言葉を比較対象として調査することも検討したい。

〈表2〉 共起する語（度数）

共起する語	平安期	鎌倉期	室町期	江戸期	計
夕（ゆふ）	3	56	39	13	111
空（そら）	3	59	27	5	94
暮（くれ）	0	28	24	6	58
秋（あき）	1	35	18	3	57
風（かぜ）	3	33	14	1	51
物思ふ（ものおもふ）	3	21	16	7	47
雁（かり）	0	17	11	5	33
時鳥、郭公（ほととぎす）、子規	1	12	11	4	28
色（いろ）	3	14	5	0	22
緯（ぬき）	0	15	6	1	22
影（かげ）	0	7	11	2	20
錦（にしき）	0	14	4	2	20
花（はな）	0	11	6	0	17
衣（ころも）	0	9	6	1	16
月（つき）	0	8	8	0	16
春（はる）	1	8	5	2	16
ささがに	2	2	4	2	10
布（ぬの）	0	10	0	0	10
綾（あや）	1	3	3	1	8
糸（いと）	1	4	1	0	5
計	26	452	256	59	793

注

- 1 竹岡正夫（一九七六）『古今和歌集全評釈（下）』右文書院
- 2 片桐洋一（一九九八）『古今和歌集全評釈（中）』講談社
- 3 紙広行（二〇〇九）『古今集』の歌ことば「くものはたて」の注釈と実作とをめぐって」（『交錯する文化と文学 東アジアとヨーロッパの出会い』文教大学出版事業部）
- 4 データベース「日本文学 Web 図書館」「和歌・連歌ライブラリー」（最終閲覧日 2023/1/31）
- 5 上代は七九三年まで、平安期は七九四年から一九一一年まで、鎌倉期は一九一二年から一三三七年まで、室町期は一三三八年から一六〇二年まで、江戸期は一六〇三年から一八六五年までとした。
- 6 合計で四〇九例が集まった。（「雲のはたて」が三五〇例、「くものはたて」が五六例、「雲の旗手」が二例、「雲之幡手」が一例、「くもの旗手」「くもの端」「雲の果」「くもの果」「雲の涯」「くもの涯」は見られなかった。）そのうち、同じ歌集の歌が計上されている場合の二例目以降を除いた二九二例を表 1 に示した。
- 7 本文中に挙げる用例の先頭の番号は資料に挙げた順に私に番号を付したものである。また、挙げる用例は「日本文学 Web 図書館」の「和歌・連歌ライブラリー」にあるものをそのまま引用する。
- 8 久保田淳ほか（一九九九）『歌ことば・歌枕大辞典』角川書店  
（広島大学大学院博士課程前期一年）